

2015年東京シンポジウム

女性が描く
「いのちのふるさと海と生きる」

開催日時：平成27年9月27日（日）13時30分～17時

開催場所：東京大学農学部フードサイエンス棟1階中島ホール

主 催

一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所

企画の趣旨

海は私達のいのちの究極のふるさとです。東日本大震災は甚大な被害と引き換えに、「いのち」のありようを根元的に見つめ直す機会となりました。20世紀後半に、日本は著しい経済成長を成し遂げた半面、この間、いのちの源である水を循環させる海へ理不尽な負担をかけ続け、「いのち」に関わる多くの大切なものを失くしてきました。なかでも、命がわき出る“宝の海”であった有明海を、司法も巻き込み混迷するばかりの“瀕死の海”に至らしめ、日本周辺から海辺で元気に遊び学ぶ子どもたちの姿を消し去ってしまいました。

東日本大震災が私たちにもたらした最も深刻な悲劇は、多くの人々から“ふるさと”を強制的に奪い去ったことであり、その大部分は「人災」と呼ぶべき悲劇であった点です。時代は、お金と物で動き、こころや環境（自然）を壊し続け、それらの負債を“断りなく”続く世代に丸投げしかねない無責任な「物質文明」社会を根本的に見直し、すべての“いのち”が大切にされる「環境・生命文明」社会へと踏み出せるかが大きく問われています。

硬直化した縦割りの組織と思考に縛られた社会を、より柔軟で多様性にあふれた本来の人間らしい社会に戻すには、母性の感性、知性、楽天性、行動力が不可欠と思われれます。「いのちのふるさと海と生きる」をメインテーマに、7月18日に実施しました京都シンポジウムの趣旨を引き継ぎ、いのちの巡りにより深く関わり、感性豊かな女性の皆さんが描く東京シンポジウムを開催いたします。いのちの多様性を考える東京シンポジウムに是非ご参加いただき、共に生きる未来への道を考えたいと思います。

平成27年9月27日

2015年東京シンポジウム 女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」実行委員会

委員長 田中 克：舞根森里海研究所所長・京都大学名誉教授

事務局 岡田和男：一般社団法人全国日本学士会専務理事・事務局長

一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所共催

2015年東京シンポジウム

女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」

プログラム

開催日時：平成27年9月27日（日）13時30分～17時（受付：13時～）

開催場所：東京大学農学部フードサイエンス棟1階中島ホール

（東京都文京区弥生1-1-1 東京大学弥生キャンパス内）

I 趣旨説明（13時30分～13時45分）

「いのちのふるさと海と生きる」

舞根森里海研究所所長・京都大学名誉教授 田中 克

II 講演（13時45分～16時30分）

講演1：ドキュメンタリー「赤浜ロックンロール」に描く三陸漁師の心意気

（13時45分～14時15分）

映画監督 小西 晴子

講演2：ふるさと一国を越えた思いを探る（14時15分～14時45分）

東京経済大学コミュニケーション学部講師 松永 智子

講演3：いのちを知り生かす身心一体科学（14時45分～15時15分）

東京農工大学工学部客員教授 跡見 順子

（休憩：15時15分～15時30分）

講演4：「森里川海プロジェクト」が時代を変える（15時30分～16時）

環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室 室長 中尾 文子

講演5：森の採譜—森と生き物たちへの賛歌“シメの贈り物”（16時～16時30分）

詩人・作家 丹治 富美子

III フロアーとの対話（質疑応答） 16時30分～17時00分

『講演者と参加者の懇親会』

※シンポジウム終了後、講演者を交えた懇親会を催します。会費は3,000円です。

時間：17時30分～19時30分

場所：レストラン「アブルボア」

（東京大学弥生キャンパス 向ヶ丘ファカルティハウス内）

講演者プロフィール・講演要旨

小西晴子氏

映画監督

【プロフィール】

ソネットエンタテインメント（株）ドキュメンタリストプロジェクト室室長。2003年から、土本典昭、黒木和雄、原一男など日本のドキュメンタリストを追ったシリーズ「ドキュメンタリスト」を制作。2005年、制作した番組「ドキュメンタリスト 綿井健陽～The Little Birds バグダッドの父と子の物語」を映画「Little Birds イラク 戦火の家族たち」（2005年/綿井健陽監督）として公開。

このシリーズから映画になったものは、「ガーダ パレスチナの詩」（2006/古居みずえ監督）、「大きな家 タイマグラの森の子どもたち」（2009/澄川嘉彦監督）など。2012年から海外との共同制作を企画し、「イラク チグリスに浮かぶ平和」（2014年/綿井健陽監督）の上映、海外展開をすすめている。2015年1月フランスで開催されたFIPA（Festival International de Programmes Audiovisuels）では、「イラク チグリスに浮かぶ平和」が、Young Europeans Jury Special Prizeを受賞。

「赤浜 Rock'n Roll」は、初監督作品。

【講演要旨】

講演1：ドキュメンタリー「赤浜ロックンロール」に描く三陸漁師の心意気

三陸地方のど真ん中の海の町、岩手県大槌町。大槌は、北上山地を源流とする川が、地下水となり、湧水として海底から湧く豊かな漁の町です。「赤浜ロックンロール」は、この町を舞台に、国と県が提案した14.5mの防潮堤にNOといった赤浜地区の住民の、海と生きる誇りとふるさと再生への意地を描いたものです。

地区の代表の川口博美（ひろみ）さんは、「自然にかなうものは何もないけど、人間にあるのは知恵。孫子の代まで安心して暮らすためには、最初からもう津波の届かない高台に移るしかない。」と、国の提案を拒否しました。大槌のワカメ、昆布、牡蠣、ホヤの成長は早いと言う漁師の阿部力（つとむ）さんは、「漁師を本気でやる気のない人にはおひきとり願いたい。」と言い、優良な漁場を活かした質の高い海産物を、大槌産として消費者に届けることに心血を注ぎます。阿部さんも、「自然をないがしろにして復興はない」と防潮堤建設に反対。「ロックンロール」は、彼らの意地を意味しています。

私は、撮影で3年半、三陸に通いましたが、彼らから学んだ時間でした。「自然にはかなわない。海と生きていく」という精神は、家族と地域が支え合い、先祖を敬い、次世代のために今があるという知恵を生みました。その精神と対峙するものとして防潮堤は象徴的です。短期的利益優先の価値観は、限界が見えてきたにもかかわらず、何度も牙をむきます。今、赤浜では、仮設住宅にあと2～3年住まねばならない状況で、さらに建築費が震災前の2倍の坪80万となっています。自宅の再建をあきらめての内陸への移転が加速。そんな中で、赤浜地区以外の防潮堤の建設は着々と進んでいます。民主主義、地方の自治が問われている今、私は、住民の誇りと自律の精神をお伝えしていければと思っています。

- 「赤浜ロックンロール」公式サイト

http://www.u-picc.com/akahama_rocknroll/

<https://www.facebook.com/AkahamaRocknRoll>

松永智子氏

東京経済大学コミュニケーション学部専任講師

【プロフィール】

1985年、福岡県生まれ。有明海近郊で育つ。京都大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て、現職。学部時代に新入生向け教養ゼミ「“森は海の恋人運動”の故郷を訪ねる」（フィールド科学教育研究センター・田中克先生ご担当）で、気仙沼の畠山重篤氏に出会う。唐桑の自然に感銘を受けるも、人を束ねる言葉についての関心を深め、広報学研究の道に進む。日本の英字新聞、ハワイの日本語放送など、国や共同体の「あいだ」にあるメディアの歴史研究に取り組んでいる。著書に「複合文化社会・ハワイの日本語テレビ」（『京都メディア史研究年報』創刊号、2015年）、『「知覧」の誕生』（柏書房、共著、2015年）、『日本の論壇雑誌』（創元社、共著、2014年）、『ソフト・パワーのメディア文化政策』（新曜社、共著、2012年）など。

【講演要旨】

講演2：ふるさと一国を越えた思いを探る

青く澄んだ空に、優しく波打つ海。雨後にかかる大きな虹と、濃く深い緑に、色取り取りの花々…。今や、年間約145万の日本人が訪れるハワイ。その「楽園」イメージは私たちにとって身近なものだと思います。一方で、日本をルーツにもつハワイの人々は、「ふるさと」のことをどのように見つめてきたのでしょうか。

本発表では、1960年代から90年代にハワイで放送された日本語テレビ番組とその視聴者に着目し、日系人の「ふるさと」イメージの変容について考察します。ハワイの日本語放送は、日系1世、2世にとっては故郷を懐かしむ窓として、日本を直接知らぬ3世、4世にとっては自分のルーツをたどる扉として機能してきました。インタビューなどの事例をもとに、ハワイの人々が「ふるさと」をどのように捉えているのか、世代間の継承と自然に対する想いを中心に紹介します。

東日本大震災をめぐる「悲劇」は多くの人々の「ふるさと」が奪われる」ことであつたと言われています。それはいかなる「悲劇」なのか。私たちはなぜ「ふるさと」にこだわるのか。普遍的な問題として考えるための視点を提供できればと思います。

跡見順子氏

東京農工大学客員教授

東京大学名誉教授

【プロフィール】

1944年6月茨城県生まれ。1980年、東京大学大学院教育学研究科博士課程修了、教育学博士。1979年より東京大学教員（助手、講師、助教授、教授）。2007年退任し東京大学名誉教授、東大特任研究員。2013年より東京農工大学・工学府・客員教授、Cell to Body & Mind Laboratory を主宰。放送大学・客員教授、嘉悦大学・帝京科学大学等の非常勤講師なども務める。また、学術会議連係会員、日本宇宙生物学会、日本体育学会など諸団体役員を歴任。

専門は、細胞生物学、人間生命科学、身体運動科学、体育学、脳科学、地球重力生物学、と人間を理解する科学を構築。学術論文・著書：約150編。細胞から考える健康運動・栄養・環境学の新機軸を提唱し、「身心一体科学」の創設をめざしている。(株)アルマードとは卵殻膜の健康効果、東レ(株)とは機能性ウェアについての共同研究を実施中。

2011年3月11日時、男女共同参画学協会連絡会運営委員長。2015年4月、平成27年度・科学技術分野の文部科学大臣表彰・科学技術賞・理解増進部門を受賞。受賞テーマは「いのちを知り生かす身心一体科学の普及啓発」。これは跡見順子の研究・教育・普及活動が、科学技術に関する関心・理解の増進、知識の普及・啓発に寄与する活動である、と認められたもの。

著書に『High pressure bioscience』（共著、Springer 2015）、『人を幸せにする目からウロコ！研究』（共著、岩波書店 2014）、『骨格筋と運動』（編著、杏林書院 2000）など。

<http://www.tuat.ac.jp/~yatomi/>

【講演要旨】

講演3：いのちを知り生かす身心一体科学」

見て、触って、やってみる中で人間が生きる

人類は太古の昔から、自分たちをとりまく自然界の現象だけでなく、自分自身の体についてもおおきな関心を抱き続けてきた。3. 11東日本大震災と原発事故、そして戦後70年の日本に生きるひとりひとりに託されていることは、両者、つまり自然環境と家族・学校・職場・社会の中で生きる自分をどうつなぐのかのこたえをださなければならないことだろう。私の体験からのひとつの方向性をお話ししたい。

フィヨルドとリアス式海岸、地球大紀行、宇宙から撮った地球の映像――これらに、和辻哲郎の「風土」でみる環境と人間をおいてみる。さらに、今、ここに生きている自分をつなぐ。なぜ自分の指を自分の手首にそっとおくと心臓の鼓動が感じ取れるのか。脈をとって時間をはかった古代ギリシャに生きた哲人たちのしぐさを思い語り、同時に培養皿の上で、一つ一つに切

り離してもなお一個の心臓をつくっていたときと同じように収縮して時を刻む心筋細胞たちにつなぐ。「いのちある人間」が、「いのちを生きること」を探る。

思いも掛けず入学することになった体育学で、生理学者渡邊俊男から紹介された「人間の生物学」には著者ショシャールの驚きと感動があふれていた。生命科学者をめざす人たちのバイブル「細胞の分子生物学」もまた同じである。しかしその賛歌は一般の人には伝えられず生命工学に頼れば健康を約束してくれるという迷信に変質してしまう。東日本大震災の前年 2010 年 8 月、畠山重篤さんに出会った。そこに「いのち」の原理から牡蠣養殖を復活させ、自然環境を生かした人の環を生み出し、エネルギー論まで展望する「いのち」から出発する日本の未来像があった。何事も自分の足で確かめ行動する実践家がいた。真の科学者だった。「森は海の恋人」に日本の文化の奥行きをみた。震災後の 6 月、はじめて植樹祭にでかけた。森・里・海とそこに生きる生命たちをつなぐなかでみえてくる日本の様々な問題への解決策があった。

自然がうみだした原理で人間社会に生きる人間が、自分を知ること―“gnothi seauton”

その日本再生、地球再生の物語にもうひとつ入れてほしいのが、「いのちある人間」の科学―「身心一体科学」である。日本では、生物学のなかに生物であり動物であり共生を旨とし、健康に生きる人間を発見することはできない。理科の教科書には「健康」という文字はない。人間は、いきものである。海にうまれた 37 億年の歴史をもつ「いのち」の末裔である。私達の身体、そして身体を住処にしている 37 兆個の細胞たちは、「いのち」の原理で生きている。脳のなかも同じだ。どこに「わたし」はいるのだろうか。人間である「わたし」は、他の生き物たちと何が同じで何が異なるのだろうか。現代を生きる私たちに不足しているのは、古代ギリシャの格言、“gnothi seauton”(汝自身を知れ)である。「人類の創造的才能を表現する傑作」としてユネスコが、評価した言葉である。日本にも「離見の見」という世阿弥のことばがある。私たち人間は、自分のことは自分が一番分かっているとおもっている。しかし、つもりと実際は異なる。動くことで生をこの地球に創発した生命体は、この地球の自然環境に適応して生きるシステムを進化させてきた。私達人間もその生命の末裔である。進展目覚ましい細胞分子生物学の基礎理論から考えると、人間の「身体」は 37 兆個の細胞と細胞が分泌した細胞外マトリクスと呼ばれるコラーゲンやヒアルロン酸など物質からできていると言える。いのちの原理は「活動依存性」である。

ちょっと頑張れば応えてくれる「いのち」のシステムを生かす

なぜ、くりかえし行う、つまり習慣にすることで上手になったり、健康になることができるだろうか。私達人間をふくむ生命たちは、その「からだ」で直接やりとりしながら環境への適応を繰り返して進化してきた。これは私たちが日々の生活のなかで日々行う家事や勉強、運動やスポーツなどで反復し行うこと、刺激に反応してゆくことで上手にできるようになることを可能にしている細胞の基本的な性質が素になっている。これを「適応」という。非生命の世界にはない「いのち」のシステムがもつ柔軟性である。「良い加減」で、「最大限の能力を発揮できる範囲につねに戻そうという絶え間ない活動」が「いのち」の基盤・ホメオスタシス（内部恒常性）を維持している。非生命と異なる適応変化できる「いのち」の大いなる特性である。実際にわたしたちの身体ややわらかく触ったり押ししたりする小さな刺激さえも、細胞たちが感受して応答している。「細胞」は、適切な刺激（ストレス）をもらうと、細胞内で働いているタンパク質のお世話をするタンパク質・ストレスタンパク質(HSP、分子シャペロンともいう)をつくり、上手に健康に応答する能力を高めるのだ。

海と陸と重力ー不安定なかたちをダイナミックにコントロールする細胞を範にして立つ技を脳を育む

陸に上がり浮力を使えず重くなった体を、さらに垂直にたててヒトは立位で歩くことを移動手段として採用した。不安定だが、見晴らしのよいこの姿勢がすっかり気に入って、歩くだけでなく他の動物の中でも優秀な長距離走者になり、がんばり俯瞰する心と脳を創った。汗腺を発明し、汗をかけば体温がホメオスタシス維持範囲以上にあがらないようにできるため、人類は武器をもたず「走り倒す」狩りの方法さえあみだした。この立位のからだを日本では器用に折り畳んで正座をし、身心一体のこころを生み出すだけでなく、上手に重力を使う日常生活で、足腰を鍛える日々の生活があった。これが可能なのは細胞も内外にかたちをつくるタンパク質（細胞骨格）を進化させて、私達が自立できるように細胞も自律的にかたちをつくり動きに応じて代謝をすすめている。平均台などのバランス運動が脳の神経細胞を増やすのもきっと同じ仕組みが働いているにちがいない。

中尾文子氏

環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室室長

【プロフィール】

1968年、愛知県生まれ。2015年から現職。環境庁（当時）中部山岳国立公園管理事務所を皮切りに、国立公園、野生生物の保護管理、自然再生、エコツーリズム等の自然保護行政に携わったほか、生物多様性条約の資金メカニズムである地球環境ファシリティにおいて途上国支援、国連大学において SATOYAMA イニシアティブの発足等を行う。現職では生物多様性及び生態系サービスに関連する国内施策・国際協力の推進等を行う。これまでの職務を通じて地域振興なくして自然は守られないことを実感している。東京大学農学部卒、ゲルフ大学大学院造園学修士。趣味は登山と三味線。

【講演要旨】

講演4：「森里川海プロジェクト」が時代を変える

かつての日本には「人工物(art)」と対立する意味での「自然」という言葉はありませんでした。そのような概念がなかったのです。明治になってから「nature」の訳語として「自然」が使われるようになりましたが、日本の「自然」の概念には、人間のこと、人間が作用したことも含まれており、厳密には「人工物」と対立してはいません。このことは、日本では、人も自然の一部と考え、また、自然の恵沢を持続的に得るために適度に手入れつつ、共に暮らしてきたことを反映していると思います。

一方、現代の私たちの暮らしは、都市に人口が集中し、海外から輸入する資源や食糧に大きく依存するようになり、自然から切り離されています。自然の恵沢を得るために手入れが必要とされているのとはうらはらに、過疎高齢化が進行する地方では放置され荒廃した土地があちこちで見られます。地方創生のためには、森里川海とそのつながりが有する機能を「自然資本」と位置付け、恵みを引き出し新たな価値を創出する戦略が必要です。また、その実施過程で育まれる自然と暮らしのつながりを意識する心と体の涵養こそが、これからの日本社会の基礎として必要なのではないのでしょうか。

特に、子どもたちについては、頭だけで分からせるのではなく、自然の恵みを感じる実体験をさせることが必要でしょう。子どもたちが社会に出るまでに、体験を通じて学び、「自然観」を持てるようになるか否かに、日本の将来がかかっていると思います。

丹 治 富美子 氏

詩人・作家

【プロフィール】

五感で読む「源氏物語」の研究をライフワークとし、森に生きることを通して大自然の中で「美しく生きる」ことを探求し、詩、随筆やオペラなどに表現している。

〔詩と音楽〕

詩は国内外の作曲家によって作曲され、詩をテーマしたピアノ曲・器楽曲と合わせて百曲に及び、アメリカ・ロシア・中国・韓国において演奏されている。

著書の歌物語り「風色の日々」は、キングレコードより CD、カワイ出版より楽譜となり出版されている。

音と文学の融合により新しい音楽の世界を編み出し、モノオペラ「髪の花」「露」「風色の日々」を創作。

グランドオペラでは「三千年の未来へのメッセージ」を託したオペラ「みづち」の脚本を創作し、多数上演されている。

- ・第 16 回国民文化祭・ぐんま 2001／高崎音楽ホール
- ・群馬県民文化祭／笠懸文化ホール
- ・日本オペラ協会・群馬県共催／新国立劇場
- ・群馬オペラ協会／前橋文化会館
- ・第 32 回全国高等学校総合文化祭／鐺木ホール
- ・国立音楽大学、東京音楽大学、東京農業大学、法政大学、お茶の水女子大学
- ・全国源流シンポジウム
- ・群馬オペラ協会 10 周年記念公演

〔随筆〕

森に暮らす日々、加速し続ける文明を危惧し、自然とともに生きることの豊かさを優しい言葉でつづる随筆を執筆。

- ・「土木施工」（山海堂刊）に「風の記憶」を連載。
- ・教育者のための科学雑誌「Science Window」にエッセイ「風の譜」を連載。
- ・森林再生プロジェクトの情報誌「森の鼓動」に巻頭エッセイ「木精する森」を連載。
- ・森林関係者の機関誌「山林」（大日本山林会）に「森の採譜」を連載。

〔歌碑〕

- ・南相木ダムに自然との共生を問いかける歌物語「水底の詩」が 21 基の歌碑に刻まれる。
- ・源流の森の恵みと流域を結ぶ「多摩源流黎明祭」にて記念歌碑として建立される。

〔校歌作詞〕

- ・群馬県立清明高等学校校歌
- ・高崎市立桜山小学校校歌

〔講義〕

- ・東京農業大学・地域環境科学部にて「いにしえに学ぶ」を講義

【講演要旨】

講演4：森の採譜—森と生き物たちへの賛歌 “シメの贈り物”

森の芽吹きが始まろうとしている。私はエゴの梢を見上げてシメの姿を探す。シメはエゴの木が好きで、いつもエゴの木に止まって庭の私を見下ろしていた。時々どこかに出かけるが、すぐまた戻ってくる。シジュウカラやヤマガラと餌台にいることもあるが、ほとんど一日中エゴの木の上である。それほどまでにエゴの木が好きなのに、毎年花の咲くのを待たずに北に帰っていく。

うつむきがちに咲く白い可憐な花の傍で、私は海を渡るシメの雄々しい姿を想像する。2013年5月15日。その日はいつもと様子が違って、エゴの木のとっぺんに止まったまま動こうとはしなかった。やっと外で過ごすことができる季節に嬉しくて、テーブルを出したり、野外のキッチンの掃除をしたりと大わらわであった。シメはじっと私を見つめていたが、そんなシメに声をかけるゆとりもなく、忙しく立ち働いていた。

午後になって、シメの姿が見えないことに気付いた。毎年、春になるとシメはいつの間にか北に帰って、冬になると窓を叩いて、元気に戻ってきたことを知らせてくれる。そんな数年間を過ごしてきたが、何故か一瞬永遠の別れのような胸騒ぎがした。寂しさはやがて溜息に変わっても、私の心は癒えることはなく、芽吹きは溜息をつく度に早まり、瞬く間にシメのいた枝を埋め隠してしまった。

そしてその年はいつにも増して純白の美しい花を咲かせ、訪ねてきた人々の称賛をあびた。冬になって、シメを待ちながら、何かの理由で飛来が遅れているのであろうと、雪のテラスに群れてくる鳥たちの中に、シメの姿を探し続けた。

小さな音にも耳をそばだて、いつものようにシメが窓に体をぶつけて私を起こそうとしている音だと思い飛び起きた。あの時の言い知れぬ予感が的中したのか、今年はずいぶんシメは現れなかった。浅春の香りが森を埋める頃になって、ようやく私は、シメはもう私のところに帰ってこないのだという現実を悲しく受け止めなければならなかった。

気がつけばイカルもコガラやゴジュウガラでさえ姿を見せなくなっている。ここ数年、私の周りは急速に開発が進んでいる。木は伐られ、数カ月で家が立ち並ぶ様子は、私にとっては瞬きをするに等しい速さであった。まるで幾重にも下がった御簾が風に吹き飛ばされたようで、遠くの人影を見つけては慌てて内堀の中に逃げ込んだ。それでも我が家ではできるだけ木を伐らずに残しているので、春の芽吹きが終わり、秋の落ち葉が落ち尽くす頃までは幸い森にいと錯覚することができた。

かつては友人たちが訪ねて来て帰る頃、こんな深い闇の中に私一人残して帰るのが忍びなく皆で涙を流したと言っていたほどであった。そんな人たちに自然は少しも恐ろしくなどなく、心ない人に誇りをけがされることのほうが悲しいと笑って答えていた。

夜の森でさえ、月明かりを辿りながら一人で歩く事さえでき、熊や鹿に出会っても、美しい所作で森の挨拶ができると自慢していた。森の生き物たちは、互いに森でのマナーを心得ていて、けっして秩序を乱すことはない。時々シメやキビタキのように、種を越えて私に近づいてくるが、私自身が森に溶け込もうとしているからであろうか。

シメは私の胸の中で眠ることもあり、頬ずりしている写真を見て、「剥製ですか」と疑う人がいてもそれは無理からぬことであろう。私の周りで起きることは、理解しがたい奇跡のようなことなのである。

そんな森の生き物たちが、森を捨てて行くのは、私を取り巻く環境が恐ろしいほどの速さで変化していているからであろう。私自身も日々、息苦しさを感じ始めていたように、シメはもう私の傍には戻れないことを悟ったにちがいない。私は追って行きたい衝動にかられながら、もう少しでおとぎの森に辿りつくことができたのにと残念に思う。寂しさをこらえながら、この地球上においてすべての生きものが共に生きられるおとぎの森とはどんな森だろうと考える。

あの日シメが私を見下ろすようにじっと見つめていたのは、別れの挨拶であったのだ。そしてあの見事な咲きようは、エゴの花の大好きな私への最後のプレゼントであったのであろう。シメは、白いエゴの花と私を眼裏に、海を越えて行ったに違いない。

趣旨説明・司会者の紹介

田 中 克 氏

京都大学名誉教授

舞根森里海研究所所長

1943年滋賀県大津市生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。水産庁西海区水産研究所研究員、京都大学農学部助教授を経て、同大学院農学研究科教授。2003年京都大学フィールド科学教育研究センター長。2007年マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所客員教授。2010年より（財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー。

この間、水産生物学、特に沿岸性魚類の初期生態を研究し、それを基盤にして森から海までの多様なつながりとその再生を目的とする新たな統合学問「森里海連環学」を2003年に提唱。国民的社会運動「森は海の恋人」と連携し、日本の沿岸環境再生の試金石である有明海における森里海連環研究ならびに気仙沼舞根湾における3/11巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復過程に関する研究を進める。

現在、舞根森里海研究所所長、NPO法人森は海の恋人理事、NPO法人ものづくり生命文明機構理事、NPO法人SPERA 森里海・時代を拓く理事

主な著書：魚類学下（1998年、共著）、森里海連環学（2007年、共著）、森里海連環学への道（2008年）、稚魚一生残と変態の生理生態学（2009年、編集）、水産の21世紀—海から拓く食料自給（2010年、編集）、森と海を結ぶ川（2012年、共著）、森里海連環による有明海再生への道（2014年、監修）など

【メ モ】

アンケートのお願い

本日は、2015年東京シンポジウム 女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」にご参加いただきありがとうございました。

本会におきましては、本シンポジウムの内容を、本会会誌アカデミアNo.154 2015.12 に掲載し、広く配布いたしたいと考えております。

また、本日のシンポジウムに参加された皆様方のご感想、ご意見等も合わせて掲載させていただきたく、つきましては、裏面にご自由にご記入いただければと存じます。

なお、会誌への掲載を望まれない方は、その旨記載願います。

おって、会誌をご希望の方は、お送り先をご記入いただければ、無料にてお送りいたします。

アンケート

会誌の送付を、希望する。 希望しない。

お送り先 住所：〒

宛名：

よろしければ、ご記入願います。

性別： 女性 男性

年齢： 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代
70歳以上

ご住所： 京都市府内 近畿圏内（ ） その他（ ）

本シンポジウムの開催を何でお知りになりましたか

チラシ 知人 新聞 HP その他（ ）

○本日のシンポジウムの感想、意見、参加された動機等をご自由にお書き下さい。

（ 感想等の本会会誌への掲載を望まれない方は、内にチェックを入れてください。）

※ご協力ありがとうございました。